

黒と髪と彼女たち

KURO to KAMI to KANOJYOTATI



装幀
鈴響雪冬

失恋と理容師と向日葵	4
放課後と買い物とワイン	11
猫と彼女と夜の空	19
寝起きと寝癖と異世界	29
祭りと銭湯と輝く大輪	36

と 恋 失
と 師 容 理
葵 日 向

木肌の色にも似た軟らかい光が窓の外から伸びているのを視界の隅に見留ながら、桁すらも忘れてしまった今日幾度目かの欠伸をかみ殺し、たばこの箱へと手を伸ばし――勢いよくドアチャイムが鳴り響くと、最愛の彼に一方的に振られてしまつてさんざん泣きはらした後のような目をした女の子が入つてくるなり、「ぼつさりと切つてください」と、これまたドアを開けたときのような勢いで言い放つた。

*

再び時間が動き出したのは、彼女が「あの…」と細い声を出してからだった。

「あっ、ああ、すまない。こちらへどうぞ」

散髪台のある方を示して彼女が動き出すのを目で追いかけるながら、引き出しから刈布を取りし、広げた。椅子に座つた彼女の後ろに回り、そのマントを使つて彼女の首から下を覆い隠していく。マントの下に隠れた髪と首の間を手を入れ、その髪を外へと掻き出――。

その感触は、透명한空気で編んだ糸が手のひらの上で

踊っているかのような感触だった。

それと同時に辺りに広がった香りは、その貴婦人の踊りには良い意味で似合っていない、軟らかい石けんの匂いだった。

えっと…。

その匂いには、記憶をかき消す能力があるのだろうか。次にすべき行動を私は即座に思い出すことができなかつた。それでも体が覚えていたのか、すぐに「どのよう切りましょうか」と尋ねた。

「えっと、ぼつさり、お願いします」

改めて彼女の髪へと目を向けた。水色の刈布の上に広がる、すべての始まりを思わせる闇の上を、天の川にも見えるハイライトが意志を持っているかのように僅かに揺れ続けている。

「ということは、ショートにするとということでしょうか」

「はい」

それだけを言うのが精一杯だったのか、最後の言葉と同時に彼女は俯き、しきりに鼻をすすり始めた。店内には彼女の鼻をすする音と、それに合わせて揺れる髪と刈

布がこすれ合う音だけが響き渡る。その後ろ姿と、店に入ってきたときの情景、発せられた「ぼつさり」という言葉が重なり合うと、はさみを握ろうとしていた手の動きが自然と鈍くなった。

これは本当に切ってしまったても良いのだろうか。一メートル近くあつたという客の髪を切つたことがある友人は、多少もつたいないと思つたが指示されるがままに切つたと言つていた。でも、その時の客はイメージチェンジが目的だったという。でも、今、目の前にいる彼女は――。

もちろん、イメージチェンジと言う可能性だつてあるだろう。鏡に映る彼女は、表面を撫でるように軽く施された化粧や、目元の若々しさを見る限り、二十歳手前……大学生ぐらい。髪は短めに、というのが当たり前前の世代でこの髪型なのだから、自然といえる。毛先は腰の少し上辺り。別に、一メートルもあるというわけでもない。四五年もあればこのぐらいの長さにはなるのだし、思い入れもそれほど深くないのかもしれない。

でも、私にはそれ以外の目的があるように思えてならなかつた。